

研究・調査報告書

報告書番号	担当
347	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption and lung cancer risk in the Environment and Genetics in Lung Cancer Etiology (EAGLE) study. 飲酒と肺がんのリスクについて	
執筆者	
Bagnardi V, Randi G, Lubin J, Consonni D, Lam TK, Subar AF, Goldstein AM, Wacholder S, Bergen AW, Tucker MA, Decarli A, Caporaso NE, Bertazzi PA, Landi MT.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Epidemiol. 2010 Jan 1;171(1):36-44. Epub 2009 Nov 22.	
キーワード	
飲酒、肺がん、喫煙、症例・対照研究	
要旨	
目的： 一般地域住民を対象としたコホートで飲酒と肺がんのリスクの関連について検討する。	
方法： 対象は一般地域住民対象とした症例・対照研究、the Environment and Genetics in Lung Cancer Etiology (EAGLE) study 研究の参加者。ケースは北イタリアの 13 病院から集められた 2002 年から 2005 年に肺がん初発の患者集団 2100 人、対照は性別、年齢、地域を合致させて無作為抽出した地域住民 2120 人である。飲酒についてはケース 1855 人、対照 2065 人の成人から聴取した。喫煙や食事状況、教育歴、血算の情報が収集された。平均アルコール摂取量別の肺がん発症のオッズ比をロジスティック回帰により算出した。	
結果： 非飲酒者の肺がん発症のオッズ比 (95%信頼区間) は 1.42(95%CI: 1.03-2.01)であり、一日あたり 60g 以上の大量飲酒者は 1.44(1.01-2.07)であった。いずれも一日あたり 0.1~4.9g 以下の少量飲酒者と比較すると統計的に有意に肺がんリスクの上昇を認めた。飲酒の影響は喫煙習慣により修飾を受けており、非喫煙者においてはこのような飲酒による肺がんリスクの上昇を認めなかった。	
結論： 大量飲酒は喫煙者においては肺がん発症のリスクであった。喫煙の交互作用を完全に除く事はできないが、今回の検討結果は飲酒習慣と喫煙習慣の相互作用を示しており、肺がんリスクを減少するためには、飲酒と喫煙という回避可能な要因を回避する必要性をうながしている。	